

自己評価報告書

平成23年 4月25日現在

機関番号：15401
 研究種目：基盤研究（B）
 研究期間：2008 ～ 2012
 課題番号：20320103
 研究課題名（和文） 世界遺産・厳島の総合的研究—「伝承・伝説の時代性」の視点から—
 研究課題名（英文） Integrated research on the world heritage site Itsukushima
 - from the point of view of tradition, transmission
 and their change over times
 研究代表者
 狩野 充徳（KANO MITSUNORI）
 広島大学・大学院文学研究科・名誉教授
 研究者番号：30132426

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：史学・日本史

キーワード： 厳島神社・伝承・厳島文書・厳島縁起・海上祭祀・世界遺産・神祇信仰

1. 研究計画の概要

交付をうけている研究課題は、種々の伝承に包まれた世界遺産・厳島を人間の営みが造りあげた文化遺産として、人文学の立場から学問的に位置づけ直し、世界遺産としての価値を高めようとするものであり、いわば世界遺産・厳島を神話の世界から人間の世界に取り戻そうとするものといえよう。そのためには、古来から神のみが住む島という神話や、平清盛によって創建されてきた社殿は不変のものであり、神の住む島（＝聖地）として崇拝され、近代文明化のなかでも「清浄」の地であったという通説の吟味が必要になる。

これをふまえ、研究計画調書では、①島南側の発掘調査ないし発見された考古遺物の分析を進めて、平安期までの時系列による考古学的な分析を行う、②平安期の文書・記録史料から佐伯氏など厳島勢力の動向を整理し、清盛時代への基盤形成の跡を明らかにする、③近世和書の整理・翻刻を進めるとともに、寄贈者についての調査・データ整理を行う、④建築物のデータを整理して、その全体像から文化財学的な考察を行うとともに、大願寺文書の調査を進めて意識面への手がかりを得る、同じく大願寺文書の分析から、近世における厳島神社の神仏分離への動きを考察する、⑤大正・昭和期「芸備日々新聞」の厳島関連記事について収集を進め、文明化と接触した後の姿を分析していくという重点課題を設定していた。また申請時に、それまで非公開の厳島神社棚守（現宮司家）野坂家の文書調査（宮島町史編纂時に撮影されていた近世期写真史料の閲覧）が許可されたため、この点も⑥番目の課題に掲げていた。

もちろん、上記6点以外にも、参加している研究分担者の問題関心にしがって、厳島

をさまざまな切り口から学問的に分析することを計画していたことはいうまでもない。

2. 研究の進捗状況

主要な6点の課題とその他の課題を追究するために、研究計画調書の研究計画・目的に記したように、研究代表者・分担者を①「古代・中世の遺跡・遺物と伝承検討」担当、②「近世～現代の建築・観光と伝承検討」担当、③「近世文芸・口承文学と伝承検討」担当の3グループに編成し、①②の課題を①グループ、③とその他の課題を③グループ、④⑤の課題を④グループ、⑥の課題を①④両方グループが担うかたちで、研究を推進している。

①グループ担当部分については、発掘調査候補地の精査をすすめるとともに、厳島の遺跡を、他の島嶼部における祭祀遺跡や一般遺跡と比較する作業や、時系列的・考古学的分析をすすめる作業を進捗させる一方、鎌倉・室町時代の文献史料に関連して、『広島県史古代中世資料編Ⅱ・Ⅲ（厳島文書編）・Ⅳ（県内文書編）』など関係史料を載録する史料集のデータベースを整備して研究環境を整えた。

③グループ担当課題については、周辺の図書館や資料館に所蔵される厳島関係の古典籍を調査し、未周知の『厳島縁起』写本を発見しての翻刻・紹介や、『懐珍厳島記』や滑稽本『宮島土産』の諸本調査を継続するなど成果をあげつつある。また、厳島に詩文を奉納した広島藩儒寺田臨川や、広島を活動の拠点とした国学者近藤芳樹などの具体的な厳島との関わりの史料収集に努めている。

また④グループ担当部分については大願寺文書の調査を継続するとともに、「芸備日々新聞」の調査も実施し、大正期後半までの厳島関連記事について復刻作業を行った。さらに課題⑥遂行のために①④両グループ

の文献史料担当者が合同で調査を実施した。
3. 現在までの達成度

②おおむね順調に進展していると自己評価している。課題①の発掘調査こそ実施できていないが、これは候補地の精査によってあまり成果が期待できないことが判明したからであり、また厳島自体が様々な法の規制下にあり、調査地設定が困難なことによるものである。しかし、厳島と他の島嶼部遺跡との比較は、縄文から弥生・古墳の時期で進展している。②の課題については史料収集・整理の段階であるが、研究史の豊富などでもあり、若干の時間が必要かと考える。むしろ中世後期の史料データベースを整備しえたことは、学界に寄与するところ大である。

課題③④⑤に関しては、上記進捗状況に記したように成果があがっている。このほか④の課題に関連して、日吉大社など厳島神社と同等の社格・歴史を有する有力神社の現地調査を実施して社殿建築・社頭景観等の分析を行い、その結果、本殿形式の分類や有力神社の本殿の内部構造に関する新たな知見を得るとともに、厳島神社の特殊な本殿形式の起源とそれに対する従来の俗説を吟味しえたことは大きな成果であった。

また課題⑥についても、調査の結果、近世関係の情報の増加のみならず、未活字非周知の中世文書が含まれていることを確認した。近世関係では、その一部を研究論文に反映できたが、中世史料についても複写やデータベースへの組み入れを行い、厳島とその周辺の社会経済の構造的変化を検討する材料をふやすことができたのは、有益であった。

以上のように①～⑥の課題については、一部遅れ気味のところはありますが、おおむね順調である。またこれ以外にも近代文学に関連して、厳島における軍事施設の存在に焦点を当て、国家防衛上の厳島の役割をうきぼりにしたことによって、文芸思潮上での厳島の近代を考える視点を確立するなどの成果があがっている。

以上の点を考えおおむね順調に進展していると判断する次第である。

4. 今後の研究の推進方策

基本的に順調に進展しているので、合同検討会などをとおして、成果の共有化をはかるとともに、若干たち遅れている分野については、RAによる補助など、環境面を整備して、課題の遂行を実現させたい。

5. 代表的な研究成果

〔雑誌論文〕(計 47 件)

1. 中山富麿、近世厳島神社の財政について、内海文化研究紀要第 39 号、①～⑩頁、2010 年、査読無
2. 勝部真人・櫻武加奈子『芸備日々新聞』厳島関連記事(6)、内海文化研究紀要第 39 号、1～22 頁、2010 年、査読無
3. 三浦正幸、神社本殿の分類と起源、国立

歴史民俗博物館研究報告、第 148 集、85～108 頁、2009 年、査読有

4. 古瀬清秀・加藤徹、厳島における考古学的踏査とその検討(4)、内海文化研究紀要第 37 号、1～17 頁、2009 年、査読なし
 5. 高永茂・中村美由紀、宮島に見られる観光客向け表示についての社会言語学的研究、厳島研究第 5 号、4～12 頁、2009 年、査読無
- [学会発表](計 18 件)

1. 西別府元日、安芸・備後における律令国家の成立、広島県立歴史博物館春季特別展記念講演、2010 年 4 月 25 日、広島県福山市
2. 本多博之、戦国期の瀬戸内海水運と政治権力、広島県立歴史博物館開館記念公開シンポジウム、2009 年 11 月 1 日、広島県福山市
3. 三浦正幸、享徳四年焼失再建の都久夫須麻神社本殿、日本建築学会、2009 年 8 月 28 日、仙台市(東北学院大学)
4. フंक・カロリン、The role of heritage and its interpretation in the diversification of mass tourism destinations in Japan、International Geographical Congress、2008 年 8 月 13 日、Tunis (Tunisia)
5. 妹尾好信、厳島神社御文庫「名山倉」所蔵図書について、記念シンポ「宮島のフロンティアを語る—広島大学からの発信」、2008 年 7 月 26 日、広島県東広島市(広島大学)

[図書](計 7 件)

1. 岸田裕之、吉川弘文館、『大名領国の政治と意識』、2011 年、439 頁
 2. 高永茂・周防大島文化交流センター、広島大学地域連携センター『宮本常一文庫目録』、2009 年、95 頁
 3. 岸田裕之・西別府元日・勝部真人・中山富麿・藤川誠・脇坂光彦、吉川弘文館刊、『広島県の歴史散歩』、2009 年、336 頁
 4. 野島永、雄山閣出版、『初期国家形成過程の鉄器文化』、2008 年、298 頁
- [その他]

研究成果を地域社会に還元するために、広島大学博物館と共同で「世界遺産 宮島の魅力—発進!! 広島の宮島学」を開催(2008 年 7 月 17 日～8 月 7 日)するとともに、研究分担者 6 名による公開講演会「もっと深く、もっと広く知ろう宮島の歴史と文化」(2009 年 10 月、広島市まちづくり交流センター)を開催した。さらに、研究代表・分担者全員が構成員である世界遺産・厳島—内海の歴史と文化プロジェクト研究センターで刊行している『厳島研究』の、5 号・6 号・7 号を刊行したが、その成果の多くは、科研費の執行によるものであり、その内容も地元新聞で紹介されるなど、研究成果の公開に努めている。